

牛久：学校周辺に見る自然

第72号 ひたち野西隣公園

2012年3月15日発行

< 冬の水辺公園 ～1. ロゼット（キク科） >

皆さん、お久しぶりです。今年度は小学校の仕事が思いがけず2月いっぱいまで終わりということで、4月の授業が始まるまで寂しいですが、これまでやり残してきたことを少しずつ進めております。

今回は、まぼろしとなってしまった「冬の水辺公園観察（ひたち野うしく小4年生）」です。予定日が学級閉鎖と荒天で2度ともダメで、とうとう中止となってしまいました。しかたなく、スライドで「生きものたちの冬ごしのようす」を解説しましたが、やはり、冬の寒さや乾燥を実感しながら、動物や植物たちがどうやってそれに耐え、あたたかい春を迎えようとしているか、観察を通して感じとって欲しかったですね。



セイヨウタンポポ（ヨーロッパ原産）

前置きが長くなりました。皆さんと歩けなかったので、私が今回の授業のために下見で歩いた時のようすを紹介していきます。まずはじめは、中根小の冬の校庭観察シリーズ第68号でも紹介した「ロゼット」について。さすがに校庭とは違って多様な環境をもつ水辺公園ですので、外国からやってきた帰化植物も含め、いろいろな種類の「ロゼット」が見られました。あまりに数が多いので、2度に分け、今回はタンポポなど、キク科の「ロゼット」です。



ブタナ（ヨーロッパ原産）：はじめは左のように葉の切れこみが浅いが、しだいに右の写真のように深くなってくる。

上はブタナ。「タンポポモドキ」という別名もあり、よくタンポポと間違えられますが、花をつける茎が枝分かかれし、葉が厚ぼったくて、かたい毛が多いので区別できます。

左はコウゾリナ。ロゼットはタンポポに似ていますが、かたい毛が多く、ブタナと違って葉がうすいので区別できます。また夏には高く伸びた茎にたくさんの葉や花をつけ、ロゼットは枯れてしまいます。



ブタナ（ヨーロッパ原産）：毛でざらつくので「カミソリ菜」からついた名。夏には茎に葉や花をつけ、ロゼットは枯れる。



オニタビラコ (アカオニタビラコ)

:「赤おに」は自然度の高い土地に多いらしい。



オニノゲシ (ヨーロッパ原産)

:「ゲシ」の名がつくが、ケシ科ではなくキク科。



ウラジロチチコグサ (南アメリカ原産)

:裏が毛でまっ白な葉を、地面にはりつくように広げる。



オオジシバリ : 田んぼのあぜなど、水分の多い土地によく見られる。茎は地面や浅い地中をほう。

こちらは、オニタビラコ。ロゼットはタンポポに似ていますが、茎が伸びると、その先にたくさんの花をつけます。第3号でも紹介しましたが、ロゼットに赤い部分があり、1本とか少ない茎を伸ばすアカオニタビラコと、花をつける茎がたくさん株立ちになり、ロゼットが濃い緑の(つまり青々としている)アオオニタビラコに分けられることも多いようです。写真のロゼットは全身まっ赤ですが、これは「赤おに」なのか、それとも花のころには濃い緑に変わっているのか、気になります。また、この二つのタイプのオニタビラコが、環境による違いだけなのかも気になりますが、アカオニタビラコのほうが、自然度の高い土地に見られるそうなので、市内での分布のようすを調べてみるのも面白いかもしれませんね。

左は、オニノゲシ。まだ葉の切れこみが浅いですが、だんだんと深くなり、ふちのトゲももっと痛そうになってきます。うっかり写真にはとっていませんでしたが、日本にもともとあるノゲシも公園内にあります。

こちらは、ウラジロチチコグサ。地面にはりつくように葉を広げ、裏側はその名の通りまっ白ですが、よく見ると白い毛がたくさんはりつくように生えているのでそう見えることが分かります。茎を伸ばし花を咲かせるころになっても、ロゼットの葉は残っています。タンポポのように一年中ロゼットの葉で過ごすものもあれば、オニタビラコ、ハルジオンのように茎を伸ばし葉や花をつけてもロゼットが残るもの、ヒメジョオンのように花が咲くころにはロゼットが枯れているものなどいろいろです。

左はオオジシバリ。この仲間では大型で、茎ははって地面をしばりつけるように見えるので「大(おお)地しばり」。ロゼットには、このように冬に赤くなるものが多いですが、そのまま枯れてしまう葉もあれば、春に緑に変わるものもあるようです。まわりの葉が枯れてしまっても、中心の方の新しい葉は、暖かくなると大きく成長します。



ハルジオン（左）とヒメジオン（右）：どちらも北アメリカ原産。葉の柄がはっきりしているのがヒメジオン。

上の写真は、花のころには似ていてよく間違えられる、ハルジオン（左）とヒメジオン（右）。ロゼットの葉は、ハルジオンでは柄がはっきりしません^えが、ヒメジオンでははっきり区別できます。またロゼットは、ハルジオンでは花の時期にも残っていますが、ヒメジオンではたいてい枯れています。その他、茎につく葉のつけ根にも違いがあり、似ているといわれる花もよく見ると違っていません。花のころにまた、比べてみるとよいでしょう。



セイタカアワダチソウ（左：北アメリカ原産）とオオアレチノギク（右：ブラジル原産）：ロゼットのころは似ている。

こちらは、花の時期にははっきり区別できますが、ロゼット（と呼ぶほど地面にはりついていませんが）の時期にはけっこう間違えられるセイタカアワダチソウ（左）とオオアレチノギク（右）です。これも花のころ、目だつ花だけでなく、葉もよくくらべて観察しておきましょう。



左はヨモギ。これも地面にはりつくといった感じではありませんが、低くかたまって葉を広げています。また、地下の茎を伸ばして新しい株をつくるので、いくつの株がつながっているか、調べてみるのも面白いでしょう。春に若い葉を摘んで草もちにしますが、雑草としては、取りのぞくに苦労するやっかいものです。

ヨモギ：若い葉は草もちに、成長した葉はもぐさとして利用された。



最後にこれも地面にはりつく感じではありませんが、冬の終わりから陽ざしのある暖かい日には咲いているノボロギク。これもやっかいな雑草ですが、畑や花壇の中にもよく見られるので、観察してみましよう。ノボロギク（ヨーロッパ原産）：暖かい日には花を咲かせ、種子も飛ばす。

【理科支援員 宮内】